

やぶなべ

青森県立青森高等学校生物部 発行

誌名	やぶなべ
号/発行年/頁	29 / 1985 / 26-30
タイトル	八甲田の植物
著者名	角田真士

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

八甲田の植物

3年 角田真士

"八甲田の植物"と大層な題についていいますが、内容は1984年度の夏休み中に行われたキャンプで八甲田に登った時の様子を伝えます。

8月7日早朝、私達はやはり早起きました。その日は赤倉岳、井戸岳、大岳の縦走を手戻さずにおこなったためである。AM 6:30頃バスに乗り、7:00頃、ロープウェイ乗り場に着いた。しかし無情にもロープウェイの第一便は9:00発で、私達は閉めきられた建物の中に入ることもできず、外で1時間半ほど暇をつぶした。

ロープウェイで山頂駅に着いた時は曇りが出てきて、多少の不安が胸を横ざった。然、とにもかくにも目的地へ向って皆歩き出した。途中までは小学校の遠足で歩いたことのある道だったのでそれほど苦ではなかったが、上へ登るにつれて少しずつ寒くなっていった。一応私は植物班なので、途中の道草から、両わきにたたくむ高山植物を観察しながら登ったのだが、残念ながらおぼろげながらにしか覚えていない。小山内・葛谷両先生、嶋海・蝦名両先輩に、ギンショウソウ、タチバナボウシ、コバイケイソウ、チンケルマ、アオツカザクラ、カニコウラン……等々、いろいろ教わったのに、名前と実物が一致せず、現在非常に苦勞している。

何とか昼ごろには目的地に着いた。そこは残雪が未だにあり、我々が昼食をとっている横ではスキーを乗した人組までがいた。雪どけ水かとても冷たく、腹も満たさず、なんとも心地よかったのだが、まだまだ元気な小山内先生が更に上を目指して登り始め、皆にせかされ、仕方なく流石を従え、先生のおとにつけて登っていった。どんどん、どんどん、ずーっと登っていった。そこはまさに人跡未踏の地であり、草や木が登りにくかったが、下を見ると休んでいる皆が虫けらのごとくに小さく見え、周りを見わたすと、名前のよくわからず(もちろん、おさま先生の名前を聞いたが)花が咲き乱れ、本当に来て(登って)よかったと思った。あはれ、下で休んでいるのは絶対に味わうことのできる、久しぶりの、本物の感動であった。

休憩後、私達は(当然のことながら)下山した。しかし、この下山がなんとにもきついものになろうとは、その時、誰か予見したであろうか。行きはロープウェイを使、ただか帰りは全て徒歩であり、道は急斜面のうえにすべりやすく、草木がかなり濃く生い茂っているため、少し前の人に遅れをとると、前の人が見えず、しかも皆、なかなかのハイペースで歩いたので女子は特に大変であったと思われる(もっとも私と流石はとけなりに、その状況を楽しんでいた節もあるのだが……。当然皆、面白いように転び、私は絶対転ばないように気をつけていたのだが、かなり下ってから、おもしろい乗り手に転んでしまい、結局2~3回は転んだ。痛かった。

何はともあれ皆、大したけいもせず無事にテント設置地へ戻る事ができ、キャンプ2日目も無事に過ぎ去った。最後に二言ほど言わせておけば、あの下山のために次の日はふくらみ草が大変だったという事。そして、個人的意見として来年ももう一度登ってみたい日と言うと、みんな怒るだろうか。実際自分でもあまり積極的に登りたいと思わなりのだが、何と言っても、あの休憩地の斜面に咲き乱れた高山植物群は登山難いのである。

どうも前書きが長びいてしまったが、そろそろ本題に戻って植物について書きます。とはいっても、そんな、あるゆるほどの知識もないので、努力だけでもかた下さし。



ヨツバシオガマ
Pedicularis japonica Mig. —ゴマのほぐす科—

茎は10cm内外から50cmくらい。葉は各節に4枚、時に3~6枚輪生。花期は7~8月。湿気ある草地を好む。本州中部以北、北海道南千島の色丹島に分布する。

左図にはおそろしく葉はかかれていないと思われる。



ホソバイワベンケイ (サカリソイワベンケイ)
Rhodiola ishidae Hara — ベンケイ科 —

根茎は肥厚して小さな鱗片に覆われ、下部は分岐する根となる。鱗片の腋から数本の茎を立てる。茎は単一、多肉で高さ20cm程、多数の多肉な葉を互生する。雌雄株を異にするを常とし、又4数であることもこの属の特徴。花期は6~7月。北海道と本州中部以北の高山帯の日当たりの良い岩石地に分布する。

図は雌株ではないかと思われる。

キンコウカ — カリ科 —
Narthecium asiaticum Maxim

多年草。葉は線形で長さ15cm前後で、やや硬質。鋭尖頭。基部は鞘状で次の葉を包む。花は葉よりも長い花茎の梢部に多数総状につく。花期は8月で、本州北部と北海道の低山帯上部から亜高山帯の湿地に分布する。花の色はゆり科に似しく黄色である。



ミヤマアキノキリンソウ *Solidago Virginica* L. var. *leiocarpa* Mig
 — きく科 —

高さ30cm以内の多年草。花期は8月で、北海道、本州、四国、九州、樺太、千島、朝鮮、満州、シナ、フィリピン諸島の亜高山帯から高山帯の下部にわたる場所に分布する。花の色は黄色。





ウメバチソウ —ウツクシ科—
Parnassia palustris L. var. *multiiseta* Ledeb.

高山上では高さ10~30cm内外の多年草で、全体無毛。

葉は心臟形で、全縁、根葉には長い柄があり、茎葉は只一個、茎の中部や下につき、無柄で茎を抱く。花は茎の頂端に只一個、径2~3cm内外。花片は5個で緑色の長楕円形をしていり、花弁も5個で、数本の透明の脈が、堅に走る卵状楕円形をしていり。雄しべは5本あり、雄しべと雌しべの間に、ハサミ状に深く切れ込んだ5本の仮雄しべがある。子房は卵形で、上端に4稜する短い柱頭を持つ。水平的にも垂直的にも広く分布する種類である。又本州と北海道の高山には、コウメバチソウという形の1品が稀に産する。高さは5~6cm。花の径5~6cm。仮雄しべは僅か9~11本にわかれる。18世界の寒冷地と高山に分布し、日本ではほぼ全土に分布する。

シシクマ —ハナ科— *Sieversia pentapetala* Greene var. *dryadoides* Takeda.

匍匐性矮小灌木で、高さ10cm内外。葉は1年生で、剛質、滑沢、奇数羽状複葉で、長さ2~4cm、幅1~2cm、小葉は3~5対で長楕円形又は倒卵状長楕円形で、基脚は楔形、中部以上に缺刻状不齊の鋸歯がある。花茎は草質で3~6cm。花は径2cm内外で、5、5、5、5、5の花弁は5枚で倒卵形、鈍頭。花がすむと花茎は伸びて10cm余りとなり、花柱は伸長して7cm程となり、淡紫褐色の絹毛を生じ、それが開いて独特の繻子をなし、パラシュートの用をなし、果実を遠近の地に運搬するのに役立つ。花期は7~8月。高山帯の湿潤地に生ずる。本州中部と北海道に分布。

ウツギギク 茎は単一で直立し、20~30cm。中部以下に3~4対の葉をつける。花は黄色で花期は
一きゆう科一 8~9月。高山帯の適潤地に生じ、花は日に向けて回る。この花は比較的覚えやすく、
葉の付き方に特徴があるので青高祭では重宝した。

イワギキョウ 多年草。花茎は10~15cm内外。花は面側茎の先端に1個付き、花期は7~8月。
一きゆう科一 青高祭ではおなじみの花だが、ちよと実物を見た記憶がなりのほなせだつう。

リンネソウ 茎の直径1mm余り。葉身は円形或は広円形で1cm以内、剛葉。花は4瓣白色、内
一しかね科一 面淡紅色で微香がある。花期は7~8月。この花はキャプなどで登山をするとき
比較的見つけやすかった。

ムシロズミシ 菊は皆根出、長楕円形で上面結莢。花は1茎に2~3個付き、花期は7~8月。有名
一たぬき科一 な食虫植物で、ズミシの類ではない。たしかキャプの愛宕地付近で見たような気
がするが、その時は花がなくて、名前だけを教わったような記憶がある。

イワツリコ 高さ10cm内外。花期は7~8月。この花も青高祭ではおなじみで、7月甲で
一"百の風"科一 もよく見かけた。初心者でもすぐに解ると思ふ

そろそろ残りも少なくなってきたので、頂度のつきたところで残念だが、まじめにかかふことにしよう。
前半に出てきた文章は2年の時に書いたものなので今よりは粗拙な文章ではある(と信じた)。花の
絵は2年の時のキャプの登山の際に撮った写真を参考にした。多少、見にくいと思うが、不満の方は回
鑑の方で確かめて下さい。こうして回鑑をめぐると、3年間、植物班らしいことはできてやらなかった
私でもいろいろ花を思い出して、なつかしいような、一種楽しい気分になれたのがうれしかった。及
し、もと真面目な部員であつたら、という悔いは残る。現在の植物班の方には、植物班の仕事が、
決して青高祭の、スライドだけに終始してはまぬよう切に願ふものである。けれども、3年間で一
番心に残っているのは登山であり、「かりうつき」であつた。植物班の方には、キャプの登山の際には、
(登山の前に1982年版、やまびこ第26号、pp.94を1読するとよいでしょう)
是非とも真の頂上を極めて、私と同じ感動に達して欲しい。これとなくてはあの登山は吾輩に落ちただけ
のものに思つてほつておつた。「かりうつき」に関して詳細は避けるが、私の急病の証明のような出
来事であつたとだけ言つておつた。うまくも知らぬまいかこれで終わる。一終一